

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	九重町立野上中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1		3	11名
生徒数	23	38	21		82	

研究の概要

1、研究主題

仲間とのつながりを豊かに築き、意欲的に学びあう生徒の育成
～ 基礎学力に裏打ちされた、自らの生き方を拓ける指導のあり方 ～

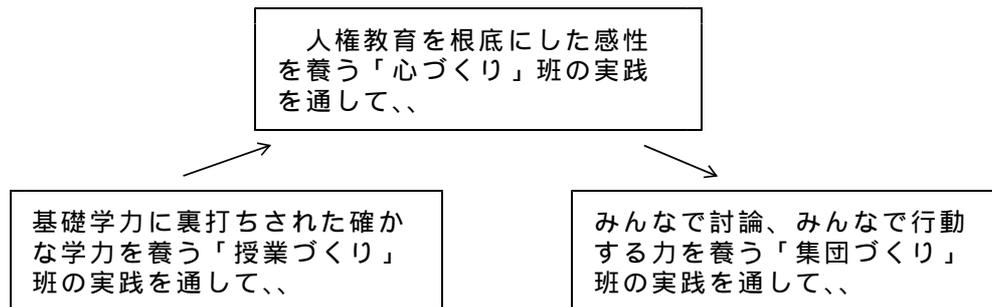
2、研究の内容と方法

1 実施学年・教科

全学年を対象とし、全ての教科・領域（総合を含む）学校教育全般に渡って実施

本校が考える真の学力とは、
ヒトが人として生きていくために必要な力を『学力』という。

そのために以下3つの側面から学力向上に向けてアプローチしていくこととした



〔注釈〕

本来「学力」をとらえるとき、狭義にとるのか、広義にとらえるのかでその教育のあり様は大きくかわってくる。

一般的に広義に言う場合は「現代的生活を営むうえで誰もが獲得すべき能力」と捉えられる。学校教育では、調和のとれた「知育・徳育・体育」の3つの領域を指し、人間形成全般を言うことが多い。

その反面、狭義でいう場合は「3'R」（「読み Reading」「書き Writing」「計算 Arithmetic」）を指すことが多い。基礎学力も同様の捉えが一般的である。本校では、広義の意味で「学力」を捉えているが、その実つかみどころのないものとなる危険性が高いとこれまで多くの学者や実践家が指定しているところである。

そこで、
本校が言うこの広義の「学力」にどう迫っていくのかといった実践的なアプローチを伴うことが不可欠であると考える。

一つひとつの学習活動に常に「子どもたちにこの活動を通してどんな具体的な力をつけようとねらっているのか」という具体目標を掲げることが最も重要である

と考える。
具体的教育実践（リアリズム）を伴いながら、本校の生徒一人ひとりにとって確かな『学力』（「ヒトが人として生きていくために必要な力」）を全職員と一緒に模索していくこととした。

そのため、

全学年を対象とし、全教科・領域（総合的な学習時間を含む）学校教育全般にわたって学力向上に向けた取り組みを進めることとした。

2 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 仲間とのつながりを豊かに築き、意欲的に学びあう生徒の育成 ～ 基礎学力に裏うちされた、自らの生き方を拓ける指導のあり方 ～</p> <p>研究仮説 各教科領域において基礎・基本の徹底を図るとともに、どの子にも活動する場面や機会（自己決定の場）を与え、その活動を認めあい、支えあえる集団を育成すれば、意欲的に学びあい、自らの生き方を拓けていく力「学力」の向上につながるであろう。</p> <p>研究の内容・方法 「ヒトが人として生きていくために必要な力を『学力』ととらえ、その『学力』向上に向け3つの研究班から具体的実践を積み上げていくこととした。</p> <p><u>授業づくり班</u> 基礎学力に裏うちされた『学力』を保障するため、「学ぼうとする力」「学んだ力」そして「学んで得た力」を各授業の中で実践研究する。そのため、各授業では「つかむ」「さぐる」「解く・深める」そして「まとめる」4つの学習過程を構成し、授業づくりの研究実践を進める。</p> <p><u>心づくり班</u> 自己理解力を含む豊かな感性と互いの人権を尊重し、協力しあえる力（科学的な判断力と行動力）をあわせ持つ力を育むことをめざす。</p> <p><u>集団づくり班</u> 学校社会において、個と個が堅く結びあい、個の思いを共有し集団の願いにまで高めること、そしてそこで得た力を自らの生き方に転嫁できる力を養う場を集団づくりと考え、「みんなで討論、みんなで行動する力」を養う。</p>
--------	--

平成16年度	<p>テーマ 仲間とのつながりを豊かに築き、意欲的に学びあう生徒の育成 ～ 基礎学力に裏うちされた、自らの生き方を拓ける指導のあり方 ～</p> <p>研究内容・方法 今年度の研究が多岐にわたるものであったことから、次年度はもっと研究の課題を焦点化させて、系統的に研究を位置付ける必要がある。そのためには、3つの研究班の実践をより密接に絡ませる研究・実践が待たれる。 また、指導内容の改善・工夫において、既習の力が十分でない判断される時や、つまずきが予想される時は、指導のどの段階で習熟度別の学習形態を入れることが望ましいのかといった指導方法の改善も急がねばならない。 さらに多様なワークシートなどを取り入れ4つの段階を踏まえた指導内容の更なる工夫が求められる。 研究が最終年度となることから、これまでの研究の継続的な実践に対する客観的な評価のあり様も継続研究していかなければならない。</p>
--------	---

3 研究推進体制

<p>研究組織</p> <pre> ----- 校長・教頭 ----- 研究推進委員会 ----- 全体研修 — 学年研修 ----- 心づくり班 授業づくり班 集団づくり班 ----- </pre>	<p>* 校内研修とは別に、本校の研究のとらえとその方向性についての研修会「教育シンポジウム」を町教育委員会と共催で開催。 大阪教育大学副学長の長尾彰夫氏を招いての講演会とパネルディスカッションを開催し学校外へ研修内容を発信。</p> <p>* これまでの研究実践のあゆみを公開発表として、近隣の学校はもとより、県内の小中学校へ研究会を秋に開催し、多くの示唆を受ける。</p>
--	--

平成15年度の研究成果及び今後の課題
1、研究成果

「学力向上対策」その命題に向けて最初に行ったのは徹底した生徒の実態調査である。そこで浮かび上がってきた緊急かつ重要な課題は、狭義の意味である学力＝「3つのR」(Reading Writing Arithmetic)の徹底である。読み・書き・計算をはじめとする基礎的学習事項の指導の強化である。日々の授業の工夫・改善とあわせて学習事項の定着に向けた復習(ドリル学習)の徹底が急がれた。

また、生徒の実態から仲間どうしのつながりが希薄であり自治の能力が十分育てられていないことが分かった。これが「集団づくり」への足場となった。

更には「自己理解力を含む豊かな感性」と「互いの人権を尊重し、協力しあえる力をあわせも力」を育む「心づくり」の研究・実践も並行しておこなうことにした。

1、まずは、[授業づくり班]の取り組みと成果である。

各教科の授業実践で学んだことがらとして次の5点があげられる。学習に入る前には生徒のレデネイスを正確に把握することが授業をうまく生かせるかどうかを左右するkeyとなる。新たな学習課題に向かうスタートラインに学習者を全員揃えておくことが大切。これらは、授業を始める際に個人差を最初からつくらなくてすむよさがある。また授業者が指導する單元ごとに何がこの單元では基礎基本であるのかを明確に示すことが大切である。授業構造を4つの段階にわけ、授業の展開をこまかに区切ること、授業の構成を授業者も学習者も容易に理解でき、「学びの道筋」を掴むことができるようになった。また段階に応じた学習形態にも変化をつけていくことで「学びの幅」を広げられた。調べ学習では、調べる対象となる素材は可能な限り身近なものであることがより望ましいという結果を得た。

2、次に[心づくり班]の取り組みと成果は、

生徒たちは本音でぶつかりあったり、心から感動しあったりすることがやや苦手である。「いじめはいけないこと」「差別はしてはならないこと」と観念的には理解はしているものの、心の底から本気で差別撤廃という叫び声は聞こえてこない。そこで昨年度に続きどこまで生徒の心を揺さぶることができるか。どこまで本音で語ることができるかを問う実践を目指してきた。その結果、まずは教える側の教職員が自らの差別性に気づき、その自分自身としっかりと向きあうことが大前提となること。そして実際に授業を仕組むためには「差別はいけない」という短絡的な発想へ導くのではなく、子ども達の心の奥に「おかしいよネ」「ぜったいに許されないことだよネ」と感じとらせることが最も大切であると学んだ。また、人権バンド『やじろべえ』のコンサートを生で聴くことにより、彼等の思いに直接触れることができた。理屈ではなく生徒の心に直に訴えること＝感性を磨くことに指導の力点をおてきた。このことは上滑りしないしっかりとした人権意識を育むうえで大変貴重な実践となった。

3、そして[集団づくり班]の取り組みと成果は、

生徒が自分の思いを本音でぶつけあい、個と個の関係を練りあい批正しあえる集団に高めていくことを、具体実践を通して体得させていこうと考えた。そのためには、生徒自身に手によって企画・運営させる様々な行事を取り組むことが有効な手立てとなると考え、生徒会活動に力を入れさせた。その際、朝・夕の短学活がどのように機能しているのか、単なる伝達学活になってはいないか。班活動が学級の中でうまく働いているのか等々一つひとつを検証していくことから始めた。

様々な取り組みを通して以下のことがらが成果としてあがってきた。短学活を単なる伝達学活にしないよう、生徒自身の手による話し合いを継続することで、話しあいの持ち方、互いの生活の様子を評価する仕方などを具体的に学ぶことができるようになってきている。班長会議を仕組むことでリーダーとは何をしなければならないのか、どう班員に語りかければいいのかを学ぶことができている。短学活からロングの学活へと連携できるようになり、学級の諸問題の解決に向けて、「学活を生徒自身の手に取り込もうとする姿勢」が伺えるようになってきている。生徒会の取り組みが体育祭の活躍に象徴されるように素晴らしい躍進をみせてきている。自治能力の育成と一言でいってしまうには、あまりに大きい課題ではあるが、一歩ずつ生徒たちは、成長しているようにある。

4、全体を総括しての成果は、

3つの研究班を構成し、本校の「基礎学力向上」に取り組んできた。これらの活動を通して各班の取り組みがそれぞれ点から線へそして面へと広がっていくこと、それぞれの実践が互いに連携し、作用しあってこそ本物の『学力』になることを学んでいる。望ましい集団づくりは、即望ましい学習集団となるだろう。互いに教えあい磨きあえ学力向上に直結してくる。また、自治活動を支えるためには豊かな感性と自己表現活動が不可欠となる。そこには裏打ちされた言語表現活動が密接につながっている。このように3つの班の研究実践が互いにつながりあい、補完しあって来ていることがもっとも大きな成果であると言えよう。本校の言う「学力向上」に少しずつではあるが歩を進められてきているところである。

2、今後の課題

今年度の研究が多岐にわたるものであったことから、次年度はもっと研究の課題を焦点化させて、系統的に研究を位置付ける必要がある。そのためには、3つの研究班の実践をより密接に絡ませる研究・実践が待たれる。

また、指導内容の改善・工夫において、既習の力が十分でないと判断される時や、つまづきが予想される時は、指導のどの段階で習熟度別の学習形態を入れることが望ましいのかといった指導方法の改善を急がねばならない。

さらに多様なワークシートなどを取り入れ4つの段階を踏まえた指導内容の更なる工夫が求められる。研究が最終年度となることから、これまでの研究の継続的な実践に対する客観的な評価のあり様も継続研究していかなければならない。

学力把握のための学校としての取組

標準学力検査(追跡調査)から見えるもの

3年生の[実態]

	国語			社会			数学			理科		
	1年時	2年時	3年時									
全体	48.2	48.4	49.0	45.8	42.2	52.4	47.0	45.3	45.0	49.7	47.4	47.8
男子	45.2	45.2	45.7	43.3	41.5	51.8	45.2	43.4	45.4	49.3	46.1	47.1
女子	52.3	52.9	53.6	49.2	43.1	53.1	49.6	47.9	44.3	50.1	49.1	48.8

	英語			全体		
	1年時	2年時	3年時	1年時	2年時	3年時
全体		46.3	48.4	47.8	45.9	48.8
男子		42.8	48.0	45.6	43.8	47.8
女子		51.0	49.0	50.4	48.8	50.1

[分析]

総体としてあまり芳しい状態ではない。全体偏差が50を上回らないが、2年時から3年時にかけて一度陥没すれど、概ね上昇の兆しが各教科に現れつつある。

要注意は、数学である。学年が上がるにつれ偏差が下降している。

数値も50を大きく下回り45を示すに至っていることに注視する必要がある

2年生の[実態]

	国語		社会		数学		理科	
	1年時	2年時	1年時	2年時	1年時	2年時	1年時	2年時
全体	48.5	51.0	47.8	49.4	47.7	44.0	50.1	48.4
男子	46.9	50.3	47.4	50.1	50.2	46.1	51.8	51.5
女子	49.8	51.6	48.2	49.0	45.7	42.3	48.6	45.9

	英語		全体	
	1年時	2年時	1年時	2年時
全体		47.9	48.7	48.2
男子		47.8	49.2	49.2
女子		48.0	48.3	47.3

[分析]
 理科を筆頭にかなり好ましい状態である。人数の多いわりに平均的な数値を残している。個別指導を必要とする生徒が少ないのがその主たる要因。
 要注意は、数学である。全体が45を下回らないのに、数学だけは45を割っているし、下降している。
 数学を苦手とする(40に届かない)生徒に注視する必要がある

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1) 教育フォーラムの開催
 文部科学省指定 学力向上フロンティア事業
 「豊かに学ぶ力を育てるための教育フォーラム」
 日時 8月28日 13:00 ~ 16:45
 場所 大分県玖珠郡九重町役場 301会議室
 内容 、講演会
 「子どもの学力は大丈夫か」(～本当の学力を考える～)
 講師 大阪教育大学副学長 長尾 彰夫 氏
 、パネルディスカッション
 「地域における教育力を高めるための各立場からの提言」
 パネラー 地域住民 佐藤 住子 PTA 佐藤 和則
 中学校 田坂 義巳 助言者 長尾 彰夫
- 2) 公開研究
 文部科学省 学力向上フロンティア事業 「研究発表」
 日時 11月27日
 場所 大分県玖珠郡九重町立野上中学校
 内容 、授業研究発表
 学級活動 1年(集団づくり班) 人権学習 2年(心づくり班)
 国語科学習 3年(授業づくり班)
 、Lの時間(学力向上対策のためのドリルタイム)発表
 、全体研究発表

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 全領域
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無